
Fate/the arrow of faith

kawajanz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / t h e a r r o w o f f a i t h

【Nコード】

N 4 3 9 8 R

【作者名】

k a w a j a n z

【あらすじ】

『F a t e / s t a y n i g h t』UBWルート、七日目から分岐するF a t e再構成長編SSです。内容としては「美綴綾子ルート」です。

設定

F a t e / s t a y n i g h t UBWルート、七日目から分岐。

士郎と凜が屋上にいる際にライダーが結界を発動し、四階で士

郎がセイバーを召喚する。その後、士郎と凜は一階へ、セイバーは四階に残る。

- 分岐点 -

キャスターの使い魔が士郎と凜を襲う。士郎は、強化した机の脚でそれに応戦。しかし圧倒的な敵の数に、二人で一階に行くことを諦め、士郎は敵を食い止めながら凜に先に行くよう提案する。そして凜は一階に先に到着、瀕死のライダーと逃げる慎二を目撃する。慎二を追おうとするがキャスターの使い魔の襲撃に会い、凜はガンダムで応戦した。

I n t r o d u c t i o n

全く同じ人間はいない。

たとえ遺伝子レベルで全く同一のクローンであったとしても、生活環境や人間関係が異なれば異なる思考や判断もする。

故に、容姿に違いがない人間であろうと、その器が違えば、それは全くもって別人である。それは人間だけではなく世界中に存在するあらゆる生物、況や物体や事象でさえも、一つとして同じモノは存在せず万物がそれぞれに異なるモノとして存在している。

人間は思考する動物である。

物事を頭で考え、言葉や行動として表現しコミュニケーションをとる。物事を思考し、表現して意思疎通をとる。そうした行動をする生物はいるが、人間ほど意思疎通が可能な生物は存在しない。

そうした言動を通じて他者とのコミュニケーションをとる人間という生物は些か不思議な存在である。社会という集団で生まれ育ち人はそれぞれに人格を形成する。人格形成に寄与するのが社会であれば、社会が異なれば、その分異なった人間が育つ。

そして、社会の中でも人は様々な他者と出会い、相互に影響し合いながら、個を確固なものとしていくのである。

異なる他者とのコミュニケーションを通じて、人々は社会の中で生まれ育つ。

だからこそ、一人として全く同じ思考や行動をとる人間がいることはありえない。人はそれぞれ異なる経験をしており、その経験を元に人格が形成されて、価値観が生まれる。

故に個人が個人たるのは、そうした異なる他者が存在するからであり、個人と他者がコミュニケーションを通じて影響し合いながら相互依存しているためなのである。

記憶や経験といったモノは、そうした個人の形成や他者との人間関係に大きく影響を及ぼしていると言っていいたいだろう。その人自身の過去や経験があるからこそ、人は千差万別であり、各人各様なのである。

記憶はその人自身といっても過言ではないだろう。

記憶が全て消え去ったとき……

個は個でいられるのであろうか。

個が消滅し、新しい個が形成されるのであろうか。

それは記憶を失った本人でなければわからない。

多種多様な社会と人生が錯綜する世界で、人は記憶を蓄積して、

この世を去っていく。

人は記憶と共に生き、記憶は人と共にある。

これは、衛宮士郎と美綴綾子という二人が紡ぐ聖杯戦争の記憶。

冬木に放たれる二人の信念の矢が行き着く場所は果たして何処なのであろうか……。

Introduction (後書き)

- * - * - * - * - * -

こんにちは。kawajanzです。

私のサイトで公開中のこのSSを少しずつこちらにも移行して行く
うと思っています。

毎週更新を目指して頑張ります。

私のサイトのほうでは、結構先を進んでいます。続きが気になる方
は、是非サイトのほうにいらしてください。

<http://skybluegeneration.web.fc2.com/>

Prologue

新都にある弓道用具専門店で買い物を済ませ、家路についたところだ。あたしはよく新都から徒歩で帰る。今日も、歩いて帰っていた。

「しっかし、ビルの合間は暗いよな。夜更けに女の子一人で歩くような場所じゃないね」

自嘲するしかない。暗いと分かっているけど、ここを通ってしまうのだ。あたしの経験上、大通りを通ると5分程度の差が出てくる。たったその程度の差のために、危険を冒すのは馬鹿馬鹿しいとは思うのだ。それでも、あたしは危険を冒す自分が好きっていう変人なわけで、今日もこうして夜の路地裏を一人で歩いている。

「いかにも出そうな雰囲気じゃん」

正直、いくら現実的な考え方をして、男のような言動をするあたしでも、怖いものは怖い。霊的な存在に遭遇できるならばしてみたいという好奇心も持ち合わせているため、人より希薄な反応を示すが、あたしだって夜の路地裏を一人で歩けば恐怖感は拭えない。

「こんなときに物音が鳴るのよね」

ビル風が吹き付ける音、そしてあたしの足音。それ以外は聞こえない。今日も当たり前前に、恐怖は杞憂で終わる。そのはずだった。

”ガタッ”

近くで何かが動いた。しかし、周りには誰もいない。

「まさかな。気のせいだな」

自分を落ち着かせるためにあたしはそう呟いた。しかし、今まで
の感覚とは明らかに違う。人の気配がする。

”ガタツ……ガタガタツ”

耳をすますと、物音は上方から聞こえてくる。あたしは、音がし
た方向に顔を上げた。

「……………！！」

信じられない光景が目飛び込んで来た。紫色の長い髪をした若
く美しい女性が、ボディースーツのような身体に密着した服とアイ
マスクという異様な出で立ちで、蜘蛛のように四つん這いになって
ビルの壁面に張り付いていた。

「嘘でしょ…………」

それだけでも信じられない光景。加えて、女はあたしの方にジ
リジリと近づいて来ていた。

「安心してください。私は貴女を殺したりはしません。ただ、生気
を少し分けていただいただけですから…………」

女が口を開いた。優しくだが、鋭く不気味な声。あたしは全身を
震わせ、身動きができずにいた。

「賢いですね。逃げればその分多く血を吸っていたことでしょうか」

女はあたしの目前まで迫っていた。抱き合っているほどに接近している。もう密着していると言ってもいい。体が石になったように、あたしは固まっていた。

「私は吸血種ですから、血を吸われている時に快感を感じるだけです」

そう言って女は、あたしの着ている服を脱がし、あたしは上半身裸の状態になる。そして、女があたしの肩に噛み付いた。つうと流れるあたしの血を、女は吸っている。

「ああっ……ああああああ」

あたしの頭は真っ白になっていた。快感が電気刺激となって全身を駆け巡る。体が熱い。力が抜ける。まるで自分の意識が体から離れていくようだ。ああ、気持ちがいい。

気がついたらあたしは、病院のベッドの上にいた。肩を見るとくつきりと歯形が残っている。あの光景が嘘ではなかったことを物語っていた。

あたしの平穏は、この瞬間瓦解した。知ってはならぬ世界に足を踏み入れてしまったのだ。

Prologue (後書き)

- * - * - * - * - * -

こちらでは、サイトで公開しているものを移行していきます。
とりあえず最初のほうは毎週更新で、行こうと思ってます。

この後書きには、サイトでは語ってない小話や設定を載せていこうかと思っています。

多分にネタバレが含まれることが予想されますので、

ネタバレNGな方は、私のサイトの方で連載を読んでいただくことをオススメします。

サイトの更新情報は、活動報告にてさせていただくことにします。

教室

「士郎、どうしよう」

一階の教室に駆け付けると、遠坂が一人床に座り込んでいた。

「何があっただ、遠坂」

遠坂の表情は青ざめていた。血の気がない感情が抜け切った顔。まるで石のように、生気が感じられない。

「……見られたのよ」

唇は震え、目からは涙が流れている。こんな遠坂の姿は見たことがない。

「わたしが魔術を使うところを、綾子に見られてしまったわ」

「美綴に魔術行使を目撃されたのか？それって……」

魔術は秘匿されるべきものだ。さらには現在、聖杯戦争中。目撃者は消去することがセオリーである。俺がランサーに殺されたように……。

「美綴をこちらの世界に引きずり込んだってことじゃないか……」

普通人と魔術師は本来関わりを極力持とうとしない。しかし、普通人が一度魔術師の世界に足を踏み入れたら最後、死ぬまで抜け出せない。魔術を知る普通人は生涯、魔術を秘匿する足枷を負い、

魔術師に命を狙われる恐怖を背負って生きなければならない。

「仕方ないじゃない。綾子がこの場に来るなんて誰も予想できないでしょ？」

まさか、自宅療養中の美綴がこのタイミングで家を抜け出してまで学園に来るとは思わないだろう。ライダーの結界を発動し、キヤスターが使い魔を送り込んで、地獄と化した学園に…。

「ああ。目撃された事実是不変ならない。遠坂を責めたところで何も変わらないことは分かっているんだ。それでも、美綴に降り掛かる残酷な運命を思うと、悔しくてならないんだ」

俺が聖杯戦争に巻き込まれたのとは状況が異なる。美綴は普通人なのだ。魔術から身を守る術も知識もない。羽をもぎ取られた蝶も同然だ。飛ぶ手段がなければ墜ちて死ぬしかない。

「困ったわね。綾子を殺すわけにもいかないし」

「そつだ遠坂、美綴は？」

遠坂と二人で話し合い悲観に暮れている暇はない。

「何やっているのよわたしは！これじゃ、士郎の時と同じじゃない」

「何のことだ？」

「士郎が気にすることないわよ。それより、綾子を追っつわよ」

「分かってる。心当たりはある」

美綴が悩みを抱えた時に訪れる場所。俺はあいつがそこで悩む姿を何度も見た覚えがある。そんな彼女を俺は影で見守っていたのだから……。

薄れる意識

夢ならば覚めて欲しい。ここ数日、あたしは自分を見失っていた。路地裏で女の吸血鬼に血を吸われて以来、生きている実感が無い。あたしは何を思い、何のために生きているのか。ただただ、時間が過ぎるのを待っていた。

ふと気づいた。

『ああ、これは夢なのか……。だったら、学校に行って確かめよう』

あたしは、自室のベッドを抜け出し学園に向かった。ひたすら歩いた。意識はあったが、歩いていた記憶がない。引き寄せられるようにあたしは学園に向かい、たどり着いた。

「……うつ！」

門をくぐった瞬間吐き気と目眩が襲ってきた。

『夢なんだから関係ないか』

気にせずあたしは校舎に入ってしまった。気を抜けば倒れそうだが次第に自分が消えていく感覚。

遠くを見つめた。近くに意識を集中すればあたしはきっと消えてしまう。そう思ったからだろう。

一階の教室で何かが動いている。ガイコツ……人体模型だろうか。骨だけで動いている人型が、黒髪の女性を囲んでいる。ツインテールで凛々しい動きをする女性。きつと彼女はあたしの友人、遠坂凜だ。遠坂らしき女は、ガイコツを駆逐していた。女の指から黒々とした塊がほとばしる。ガイコツに命中し、ガイコツは派手に粉砕された。

そんな光景をあたしは、映画の1シーンを鑑賞するかのよう
に、第三者となつてぼうと見ていた。

すると、女がこちらに振り向き、目が合った。やはり、女は遠坂だった。遠坂は驚いた表情をしていた。

つい先日まで当たり前だった生活が、今では遠い世界に感じる。現実か夢かなんて分からない。朦朧とする意識の中で、あたしはあたしを取り戻すべく、あの場所に向かっていった。

美綴の射

冬の冷たい風が身に染みる。痛みを伴うその寒さは、外気に晒されるだけで苦痛である。その中で、顔色一つ変えず、弓を構え矢を放つ一人の女性の姿があった。

俺は美綴綾子に見惚れていた。美綴は精神を統一し、自己の世界に入り込んでいる。

射法八節に則った美しい姿勢。

足踏み・胴造り・弓構え・打起しと流れるように体勢を作る。引分けで弓を押し弦を引いた。会で引分けは完成し、離れで弓が放たれる。矢は的の中心に命中している。いや、矢が的に当たることは予め決まっていたのだ。矢を放つ前から。

それは美綴の残心が物語っていた。

「……美綴」

美しい射だった。こんな射ができるのは美綴の他には一人しか知らない。

「まるで俺の射を見ているかの様だったよ」

非の打ち所がない完璧すぎる射。百発百中が運命づけられた究極の射だった。

「……衛宮。これって夢じゃないのか？」

弓道を極めんとする者が見れば、美綴の射は褒め称えられるだろう。魅了の魔術が込められているかのような恐怖すら感じる美綴の出で立ち。しかし俺には、そんな美綴が脆く儚く見える。今にも消えてしまいそうな蠟燭に灯る小さな火。一息で吹き消えてしまいそうでなお存在感を放つ美綴の姿に俺は見惚れていた。

「ああ。現実だ、美綴」

「現実か。じゃあ、あたしはもうすぐ消えてなくなるんだな」

ああ、今の美綴はどこまでもアノ時の俺に似ている。今でも夢に見るアノ時の記憶。人間の泣き叫ぶ、呻き苦しむ声しか聞こえなかった十年前の火災現場。俺は一面炎という地獄の中で、諦観していた。

『俺はもう消えてなくなるんだ』

一つ一つと俺の短い人生の記憶が走馬灯のように思い出され消えていった。もう何も残らない。そう思った瞬間だった。

俺は、男の背中に背負われていた。そして、気づけば病室で仰向けになっていた。土郎という名前と火災の恐怖だけを残して、俺の記憶は消え去っていた。

今の俺は、アノ時の俺が残した副産物。衛宮切嗣が成しえなかった『正義の味方』の意志を継ぐ者にすぎない。俺はアノ時全てを失い、切嗣だけが俺の全てになった。

今の美綴は、自分が消える恐怖と戦っている。薄れていく自我を

必死に食い止めようとしている。

「なあ、衛宮」

静寂に包まれた弓道場に、美綴の声が響く。

「最後に衛宮の射が見たかった」

そう言い終えると美綴は崩れ落ちた。

美綴を支えていた燈が儚く消えた。

美綴はボタンと床に倒れこみ、動かなくなった。

「遠坂！！」

入り口で控えている遠坂を大声で呼んだ。

「……何があつたの？綾子、突然倒れたじゃない」

「ああ、意識が薄れていたみたいだけど、ついに限界を迎えたみたいだ」

「…そうね。魂が消えかけているわ」

やはり、俺の推測は的中していた。美綴は、自我が消えていく中で、自我を確かめようと弓道場に來たのだろう。

「なんとかなるのか？」

「わからないわ。とりあえず、宝石を飲ませるしかないわね」

遠坂は、赤く小さな宝石を取出し美綴の口に含ませた。

「まだ少し意識はあるみたいね。飲み込んだわ。あとは祈るしかないわね」

「セイバー、美綴を家に運んでくれるか？」

四階でキャスターの身代わりを倒したセイバーは、弓道場に向かう俺たちと合流し、遠坂とともに入り口で控えてくれていた。

「はい。シロウの部屋に休ませればいいですか？」

「ああ、頼む。俺は遠坂ともう少し学校に残る。生徒はまだ息があったようだし、教会に連絡すればまだ間に合うはずだ。だよな、遠坂」

「ええ、綺礼に頼めば巧くやってくれると思うわ。やけに落ち着いているわね衛宮くん」

「死体には慣れているんだ」

笑えない自嘲。遠坂とセイバーは俺を不思議な目で見ている。

「いくぞ、遠坂。美綴をお願いな、セイバー」

俺はそう言い残し、校舎に戻るため歩きだした。

目覚め

学園では教会が処理にあたり、事態は穏便に収束した。死者は一人も出なかったそうだ。原因不明の集団中毒として報道されている。

問題はそれだけではなかった。いや、俺にとってはさらに深刻な問題が目の前で起こっている。美綴が弓道場で倒れたきり目を覚まさない。

「綾子の家に行ってきたわ。魔術を使って少し記憶を操作して、綾子は衛宮くんの家で療養中ということにしてきた」

少し疲れた表情をして遠坂が帰ってきた。

「綾子に変化はあった？」

「いや、まだ何の反応もないんだ」

遠坂は小さな声で『まずいわね』と呟いている。

「美綴は大丈夫なのか？」

「わからないわ。恐らく、綾子の魂が磨耗して生気も不足しているのね。宝石を飲ませたから生気は回復するだろうけど、魂の磨耗に關しては何とも言えないわ」

「どうにかならないのか？」

「もうこれ以上わたしにできることは何もないわ。生気を回復させることはできても魂を修復することはできないのよ。魂を扱うなんてそれこそ魔法なの。魂移転魔術で魂を移すとか、見るとかいったことはできても、魂の改変つまり魂自体に手を加えることは魔術では不可能なのよ。だから、今わたしたちにできることは綾子が目を覚ますように祈ることしかないわね」

聖杯戦争に巻き込まれてしまった美綴は、生気を失い魂を磨耗し、今俺の目の前で目を覚ますことなく眠っている。

「このまま目を覚まさないってこともあるのか？」

「可能性としてはあり得るわ。でも、魂が消えてしまえば生気が回復することはないから、今生気が回復してきている綾子の状態であればすぐに目を覚ますはずよ。ただ……」

「問題があるのか」

「ええ、魂が磨耗しているのであれば綾子が目を覚ましたとしても……」

遠坂が説明をしている最中、美綴の体が僅かに揺れた。

「美綴！」

美綴はゆっくりと目を覚まし、起き上がる。

「あたしは……」

美綴は虚ろな目でこちらを見た。

「弓道場で倒れてずっと意識がなかったんだ」

焦点の合っていないかった美綴の目に、次第に光が宿って来た。しかし、その気色にどこか違和感を感じる。

「綾子？」

遠坂が美綴に声をかけた。美綴はゆっくりと辺りを見回し、そして口を開いた。

「アンタらは一体誰なんだ？ここは何処だ？あたしは一体……」

美綴は呟くような小さな声でそう言ったのだった。

喪失

「美綴、お前まさか……」

「ここはどこなんだ？あたしはどうしてここにいるんだ？」

美綴が冗談を言っているようには見えない。知らない世界に連れて来られたかのような反応。困惑を隠し切れていない。

「美綴、俺のことが分かるか？」

「……知らない」

「綾子、わたしは？」

「……分からない」

「じゃあ、自分の名前はわかる？」

「……………」

美綴の沈黙が全てを物語っていた。

「……恐れていた事態だわ」

「どついうことなんだ、遠坂？」

「記憶喪失よ。それも一時的な記憶の混乱ではないわ。魂の磨耗による記憶の欠如ね」

記憶の欠如。遠坂の言葉が意味するのはつまり……。

「もう綾子に今までの記憶が蘇ることはないわ」

俺は遠坂の言葉を理解することができなかった。いや、理解しようとするすらできなかった。

「……嘘だろ。だって、ちゃんと言葉を喋っているじゃないか」

「脳には全く異常はないのよ。魂が欠損し、記憶が欠如してしまった。自分の名前すら思い出せない状況を考えると綾子の記憶は全て消え去ったと言ってもいいわね。記憶だけがなくなってしまった。それだけだわ」

遠坂は『それだけ』と言った。確かに、事実としては『美綴が記憶喪失になった』。美綴は美綴のまま、記憶だけをなくした。それだけの話かもしれない。しかし、美綴が美綴として生きてきた17年がなくなってしまったのだ。裏を反せば、美綴の記憶は全て失われ空になったということ。言葉が話せる赤子の状態。美綴は生まれ変わってしまった。

「もう美綴の記憶は決して戻ることはないのか？」

「ええ。魔法でも使わない限り戻ることはないわ」

魔法と魔術は大きく異なる。ここで遠坂が魔法をつかったのはつまり……。

「不可能ってわけじゃないよな……」

「限りなく不可能よ！」

遠坂は俺の言葉を遮るように言い放った。魔術師として優秀な遠坂は、俺以上に状況を把握している。それ故、俺以上に心を傷めているだろう。遠坂は魔術師として普通人とはできるだけ関わらないようにしていると言っていた。そんな遠坂にとって、唯一と言ってもいい友人が美綴なのだ。遠坂が辛くないわけがない。いくら魔術師然としていても、人の心の大切さをよく知っている遠坂だから。

「取り乱して悪かった、遠坂」

俺が騒いだところで状況は何一つ変わらない。遠坂との対話でそれを理解した。

「謝るなら綾子に謝りなさいよ」

記憶喪失になって、最も困惑しショックを受けているのは、美綴本人だ。残酷な事実を次々と突き付けられる美綴の苦悩を思えば、俺たちが取り乱してはいられない。

「美綴、悪かった。お前の気持ちも考えずに勝手なことを言って」

「いや、構わない。寧ろ、あたしの友人として心配してくれたのであれば嬉しい。ただ、あたしには二人の会話を聞いていてもあたしが記憶喪失になったことぐらいしか把握できなかった。あたしが何者なのか、あんたたちは誰なのか、そしてあたしはどうして記憶喪失になったのか。説明してくれないか？」

「ああ、辛いと思うが聞いてくれ」

そして俺たちは、美綴に詳しく説明をした。

信頼

「理解できたかしら」

遠坂が分かりやすく聖杯戦争の説明をして、事の経過を掻い摘んで話した。美綴は所々で驚愕の表情を見せるものの、遠坂の話を真剣に、そして冷静に聞いていた。

「大体分かった。つまりあたしは、囚われの姫になったわけだ」

「そうね。それも、記憶喪失というオプションがついて」

俺たちは、美綴に聖杯戦争の期間中、俺たちと一緒に過ごすことを強いることになる。美綴は記憶を喪失したため、そのまま家に帰し何もなかったことにするという手段を取ることもできた。しかし、学園で美綴が聖杯戦争を目撃したことをキャスターおよび監視していたマスターたちに知られた可能性が高い。それも、俺たちが美綴を追ったことで美綴が俺たちの弱点となることを握られてしまった恐れもある。美綴を家に帰すことは、あまりにリスクが高すぎる。次に考えられたのは、教会に預けることだが、記憶を喪失した普通人、それも聖杯戦争の目撃者というだけでは、受け入れて貰える可能性は低い。気付かぬ内に家に帰されてしまうことも考えられる。魔術師たちの暗黙のルールを破ってまで美綴を生かし続けるには、俺たちが魔術師から美綴を守り監視し続ける必要があるのだ。まさに、囚

われの姫。最低限、聖杯戦争の期間は俺たちの傍から離れさせるわけにはいかない。

「で、あたしやこれからどうすればいいの？」

「わたしの家が衛宮くんの家で匿うことになるのだけれど、わたしは家を空けることが多いし、衛宮くんの方が都合はいいわね。衛宮くんの家にはセイバーもいるし」

最近には家に遠坂が来ることも多い。家なら部屋も余っているし、匿う分なら申し分ないだろう。

「なるほど、あたしは今日から衛宮と同棲するわけだ」

「いや美綴、そんな表現をすると泊めづらいんだけど」

「そうなの？さつきから聞いてると衛宮の家にセイバーさんも遠坂もよく泊まってるみたいに関こえたけど……。あたしの勘違い？」

しれつと言う美綴。分かってて質問するあたりは、さすが遠坂の友人だと思う。それに遠坂が家に泊まったのは、言峰教会から帰宅すると途中にバーサーカーに襲われた日の一回だけだ。家に泊まっている回数でいえば桜のほうが断然多かったりする。

「分かった。離れの部屋が確か一部屋だけ空いていたから自由に使用ってくれ。まあ、元々そのつもりだったしさ」

「一部屋だけってつまり、本当に泊まってるわけだ……」

美綴の言う通りなので、黙ることしかできない。桜と藤ねえに至っては、私物がありすぎていつでも引っ越しできると思う。

「それより大事な話をするわよ。綾子を衛宮くんの家で匿うとなれば、綾子の行動は制限されるわ。わたしたちの監視の下、自由のな

い生活を送ることになる」

遠坂の表情が真剣なものになる。話が逸れたことはありがたいが、遠坂は俺と美綴がやり取りしている間もずっと一人別世界を漂っていたので深刻な問題であることは間違いない。

「勿論家族とも会わせることはできないわ。貴女の家族には記憶操作を施して聖杯戦争が終わるまでは、遠くで生活してもらうことになるわね」

家族と会えなくなる。ただそれだけのことだが、美綴の場合は状況が少し複雑である。記憶を失ってしまった美綴は、家族の顔を知らない状態にある。家族と過ごした記憶も残っていない。にも関わらず、家族と会うことすら許されない。

「遠坂、あたしのことは必要以上に心配しなくていい。記憶を失ったあたしは、今何もない状態だから何が起ころうと受け入れられる。あたしはいいから、あたしの所為で誰かに危険が及ぶことはないようにお願いしたい。あたしからはそれだけよ」

美綴の心中は複雑なはずだ。しかし、美綴の表情に迷いはなかった。記憶を失ったわけであるから、俺たちが魔術師であることも言葉でしか理解できていないだろう。自身の見に降り掛かる危険も実感できていない。そんな状況下で美綴は俺たちを信頼し、身を委ねてくれている。

「美綴、俺たちについてきてくれるか」

「ええ、勿論。あたしの命はあんたらに託す」

この瞬間、聖杯戦争を勝ち抜く仲間として美綴が加わった。激動の第五次聖杯戦争が再開する。 激

始まりの記憶

見渡す限り真っ赤に燃えていた。瓦礫の山が広がり、焼け爛れた死体が周囲に転がっていた。

地獄と化した世界の中で人々は、一心不乱に助けを求めている。

声にならぬ声を必死に絞り出し、唸るように叫んでいた。

そんな中で、俺は必死に歩いた。

生き残ろうと思ったわけではない。助かりたいと思ったわけでもない。

ただ俺は、苦しさから逃れるために必死に歩いた。

恐怖を忘れるために、前へ前へ歩を進めた。

目の前で呻きながら倒れていく人たちと同じように、自分も救われることは無い。

そう諦観していても、体は勝手に動いていた。

どんなに苦しくても止まることはできなかった。

倒れるまで歩き続けた。歩を止めぬ俺に対する怨嗟の声を耳に残しながら、変わらぬ景色の中をただ必死に歩き続けた。

それが、今の俺に残る最も古い記憶。

エミヤシロウとしての最古の記憶。

たとえ消してしまいたい苦しい記憶であっても、その事実を変えらることなどできない。

十年前の大火災を境に無くなってしまった過去の士郎としての記憶。そして、この日から始まる衛宮士郎としての記憶。

体だけが生き延びて、心は死んでしまった。

切嗣に奇跡的に助けられ、切嗣の養子となって士郎の人生はリセットされた。

それ以前の記憶を思い出したくないわけではない。本当の両親の記憶や当時の大切な記憶が取り戻せるならば取り戻したい。

しかし、俺はあの日に一度死んで、生まれ変わったのだ。

記憶喪失にならなければ、今の俺は存在しない。

衛宮士郎としての生活はなかったかもしれない。

俺は過去に未練はないし、後悔だっと思っていない。

衛宮士郎として生きてきた歴史が俺の全てである。

かつての記憶を取り戻したところで俺が俺であることには変わらない。

ただ、大切な何かをあの焼け野原に置き去りにしているような気がして、今日の夢はいつもの夢とは後味が異なっていた。

始まりの記憶（後書き）

- * - * - * - *

本日より、小説家になろう！における

『Fate/the arrow of faith』は、週一連載にしようと思います。

共感

目を醒ませば、そこには見慣れた天井が広がっていた。体を起こして洗面所に向かう。

火災の夢は見慣れている。しかし、だからといって動揺がないと言えそれは嘘になる。2月という真冬にも関わらず、服はびつしよりと汗で濡れていた。息もあがっている。

顔を洗い終え、気分転換も兼ねて道場へ向かう。中に入ると先客がいた。

「やはり、シロウの朝は早いんですね」

正座して精神を集中させていたセイバーが立ち上がりこちらにやってきた。

「起床時間いつもと大して変わらないけど今日は少し嫌な夢を見なさ、気分転換に道場に來たんだ。もしよかったら剣の鍛練の相手をやってもらえるかな」

「ええ、喜んでお相手します」

そうして俺とセイバーはいつものように剣の稽古を始めた。例の如く俺はセイバーに完膚なきまでに叩きのめされ、半刻が経った頃には立つのがやっとの状態になっていた。肩で息をしながら呼吸を整えていると、視界の片隅に人影が映った。

「なんだ美綴。いたなら声でも掛けてくれよ」

壁に背を預けて腕組みをしながら美綴が立っていた。

「真剣勝負に水を差すなんてできないじゃない？」

「そうだな。まあ、勝負というよりは俺がセイバーに一方的にやられてるだけだけだな」

「それでも本気には違いないでしょうに」

美綴の返事に安堵を覚える。俺たちのことを敵対視していないようだし、一日経って錯乱状態にもなっていないようだ。

「なあ、美綴」

「ん？何、衛宮」

「やっぱり、思い出せないのか？」

魂の磨耗による記憶喪失。遠坂の言葉を信じていないわけではないが、美綴の記憶がなくなってしまったという事実をどこかで受け入れられない俺がいた。

「どうも、思い出せない」

美綴の返答は簡潔だった。分かっているけど、美綴の答えは心に響いた。行き場のない怒りと悲しみが、目尻に溜まる。

「おや衛宮、泣きそうになってない？嬉しいねえ」

「ああ、記憶喪失は他人事じゃないからさ」

鬱屈とした感情を振り払い、美綴に向き直った。美綴は不思議そうに俺を見つめていた。

「俺は十年前に一度記憶を失っているんだ。冬木市の大火災に遭ってさ、生死を彷徨った結果、それまでの記憶をこっそりなくした。両親も亡くして一人生き残った。孤児になった俺は親父の養子になって、ここにやってきたんだ」

俺の話を聞いている美綴の顔は、次第に曇っていった。考え込むように顔をしかめたかと思えば、答えが返ってきた。

「なあ、衛宮にとってこの世で一番大切なものって何？」

「そうだな。みんなの笑顔かな」

正義の味方として生きると誓ったときから、いやそれ以前から俺にとって世界中の人々の幸せが夢であり理想なのだ。

「ああ、なるほど。納得いった」

「なんでさ」

よく分からないが、美綴は何かを理解してくれたようだ。

「あら、ここにいたのね」

ちょうど良いタイミングで遠坂が現れた。

「なんだ遠坂、来てたのか。出迎えなくてすまん」

「わたしなら最初からいたわよ」

「えっ？なんでさ」

確か昨日は話し合いが終わって遠坂は帰ったはずだけど……。

「ああ、衛宮が風呂に入っているときに遠坂が来たからあたしが通したけど、衛宮に言っただけだったな」

美綴、そういう大事なことは伝えてくれ。

「というか、わたしも今日から聖杯戦争が終わるまで士郎の家に泊まるから」

「はい？」

聞いてないぞ、そんな話。

「セイバーがいるとはいえあんたじゃ心配じゃない？わたしとアーチャーがいれば心強いでしょ」

「私一人でシロウとアヤコを守るのは些か不安ですから、凜がいれば安心ですね」

うつ、セイバーに言われてしまうと倫理的問題で断るわけにはいかなくなってしまう。

「観念したかしら」

「ああ、参った。好きにしてくれ」

「ええ、もちろんそうするわ。それで今日の予定だけど、わたしは綾子の家に行つて綾子の家族に暗示をかけて冬木市外に避難させるわ。そうね、衛宮くんたちはヴェルデに綾子の生活用品を買いに行つてもらえないかしら。適当に綾子の服は見繕ってくるけど、それ以外をお願いするわ」

「分かった。美綴はそれでいいか？」

「ん？あたしに断る理由はないね」

セイバーを見ると頷いてくれた。

「じゃあ決定だな。そうとなれば朝ご飯をぱつと済ますか」

聖杯戦争八日目の朝はそうして始まった。

共感（後書き）

- * - * - * - * -

こちらは、だいぶサイトのほうのストックがない状態となってます。なんで、週一連載を決意したわけですが、週一連載を続けられるように執筆頑張りますね。プロットは結構できていたりはするんですよ、実は。

さて、私のサイトにて

【2011.03.20】Fate/the arrow of
faith「一歩」更新

しました。（現段階では『すると思います』なんですが……www）
だいぶ時間が空いてしまって申し訳ありませんでした。

新都

深山町からバスに乗って俺たちは新都に来ていた。平日とはいえ、街は人で賑わっている。

新都で必要な買い物を済ませ、宅配便で衛宮邸に届くよう手配した。様々な雑貨や衣類を買ったが、美綴の趣味は控えめだが女の子っぽいものが多く、驚きの連続だった。雑貨店で美綴がウサギ型をしたティッシュペーパー入れを見て……

『これ、欲しいな……』

と、頬を染めて呟いた時なんて、あまりのギャップに美綴の顔を凝視してしまい……

『なんだよ衛宮。あんまり見ないでくれ』

と叱られてしまった。たぶん本人も自覚はあるのだと思う。まあ、その仕返しに……

『衛宮、次はあたしの下着選びを手伝ってくれる？』

と言われた時はさすがに焦った。そんな俺の様子を楽しんでから、セイバーと二人でランジェリーショップに入って行ったからいいものの、今日の美綴ならやりかねなかったから店の外で待つ間も気が気ではなかった。

それにしても今日の美綴は可愛かった。もしかしたら記憶を失ったことで、今は素顔の美綴が投影されているのかもしれない。

その後、新都を三人でブラブラと歩いている。ゲームセンターに立ち寄って、真剣にシューティングゲームで勝負したり、いかにも男子禁制なファンシーショップの前で商品に見惚れている美綴を見かねて玉砕覚悟で入店してみたりもした。

そして現在、俺たちは冬木市中央公園にいる。ベンチに座って一休憩しているのだが、やはりここはどうにも落ち着かない。そんな俺の様子を感じ取ったのか、心配した声色で俺に声を掛けてきた。

「衛宮、顔色悪いぞ。大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ」

言葉とは裏腹に、俺の息は荒くなっていた。

「シロウ、ここは離れましょう」

「いや、俺なら大丈夫だから……」

俺はそう言ったが、二人が聞いてくれるはずはなかった。美綴の手が俺の手に重なる。

「ねえ、衛宮が言ってた冬木市の大火災はここで起こったんじゃない」

「……………」

「やっぱりそうよね。ほら、行くよ衛宮」

美綴はベンチから降りて、俺に手を差し伸べた。

「あたしの体と衛宮の心のどっちが今大切かなんて考えるまでもないだろ。あたしにとっての心の支えは、衛宮と遠坂とセイバーさんしかないんだからさ」

「……美綴」

俺は美綴の手を握りしめ立ち上がった。俺たちは振り向くことなく公園の外に出た。

冬の冷たい風が軀に凍みる。それでも忘れられた記憶が風に乗って戻って来ることはなかった。

美綴と手を繋ぎ歩く。

切嗣の背中に背負われて火災から生き延びたあの日のように、この時新しい運命の齒車が回りだしたのかもしれない。

畏

日は東の空へと沈んで行く。暗くなるに連れて周囲も一気に冷え込み、昼間よりも一層寒さが増している。最早肌に吹き付ける風は痛みを伴うほどである。ましてや、ここ冬木港は海風が吹き荒れており、風を避ける設備も乏しい。

「サーヴァントの気配はどっちだ、セイバー」

「すぐ近くですね。方角までは分かりませんが、敵がいつでも攻撃できる体勢にあるのは間違いないです」

夕刻の港ということもあり、人の姿は見当たらない。しかし、そこにただならぬ気配が感じられた。殺意を帯びた魔力の芳香。俺たちは危険に満ちた状況下にいる。

「相手の畏かもしれない。慎重に行動しよう。美綴は俺の傍を離れないでくれ」

「分かってる。それにしても凄い殺気だな」

「ええ、隠す様子もありませんね」

魔力の中心地に着々と近づいている。その方向を見ると、建物の陰に二つの人影があった。

「やあ。元気そうだね、衛宮」

「慎二！」

そこにいたのは慎二と、昨日死亡したはずのライダーだった。

「ライダーがなぜ、生きているのです」

「ははっ、馬鹿だね。君たちの誰がライダーの死を確認したんだい？ 結界を発動して生気を吸ったライダーが簡単に死ぬわけないじゃん」

昨日の事件以来探していた。ずっと探していた慎二が目の前にいる。

「慎二、なぜ結界を発動させた」

俺は覚悟を持って慎二に質問した。

「そんなの当たり前じゃん。うざいんだよ。僕を甘く見てさ。ふざけてるわけ？ 僕が本気になれば衛宮と遠坂なんて敵じゃないことくらい分かるよね」

予想通りの慎二の返答に力が一気に抜ける。

「慎二、遠坂がいなくて良かったな。殺されていたかもしれない」

魔術回路を発動させ、踵に力を込めて慎二を目掛けて跳躍する。慎二までの距離は10メートル程度。着地とともに一気に加速した。

「……くっ」

全力で走る俺の額にライダーの攻撃が擦る。俺は左に体を捻り、

体を放り投げる。

「シロウ、ここは私に任せてください。シロウはマスターの下へ」

「ああ、分かってる。セイバー、頼むぞ」

セイバーは俺とライダーの中間に入り込み、ライダーと対峙していた。

俺は振り返らず慎二に向かって走りだした。ライダーが執拗に俺を追うことはなかった。

「何をやってるんだライダー！」

ライダーはセイバーに対峙し、一步も動かずに緊張状態を保っている。俺は構わず慎二の方へ直進した。

「くそっ……」

慎二は魔道書に魔術詠唱を唱えて、魔力の波動を放つ。しかし、セイバーとの鍛練をこなしている俺にとって、慎二の攻撃を躲すのは容易だった。最早止まって見える。

「慎二、俺はお前を許さない」

「はっ…お前に何ができるわけ？」

言葉とは裏腹に慎二の顔に焦りが見える。

「ライダー、戻って来い！」

俺は振り向きセイバーと目を合わせた。

「そうはさせません、ライダー」

セイバーの行動は迅速だった。瞬時にライダーの背中に回り込み、正面でライダーの攻撃を受けとめる。剣戟は圧倒的にセイバーが優位である。ライダーは足を止めるしかなかった。

「慎二！」

「ひいつ……」

俺は慎二の目前まで迫り、慎二の首を掴んで建物の壁に慎二ごと叩きつけた。

「ぐはっ……」

「慎二、お前は何をしたか分かっているのか」

慎二の首から手を離し、倒れこんだ慎二を起き上がらせ背中を掴んで慎二を壁に押し付けた。

「自分のサーヴァントに人間の生気を吸わせるのは当たり前のことじゃん」

「当たり前だと。学校に結界を張って生徒全員が瀕死になるまで生気を吸うのを当たり前だといふのか」

「そうさ。アイツらが苦しむだけ僕のサーヴァントが強くなるんだ。

苦痛に歪むアイツらの顔は見物だったね。特に藤村なんか僕を見て、助けてって叫んじゃってさ。傑作だよ」

慎二に反省の色はない。慎二への怒りを抑え、俺は慎二に質問を続けた。

「美綴を襲ったのもお前か」

「美綴？ああ、アレも傑作だった。ライダーに吸血させたらさ、恍惚の表情しちゃってさ。喘いでんだぜ。笑っちゃったよ」

聞いていられなかった。美綴はライダーに襲われ、結界発動の際に学校に来て記憶喪失になった。慎二がライダーに命令しなければ、こんなことにはならなかった。しかし加害者の慎二は、美綴に謝罪するどころかあろうことに美綴を嘲笑している。さすがの俺でも怒りを鎮めることはできなかった。

拳を振りかぶり慎二の顔面を思い切り殴り付けた。

その瞬間だった。俺の背後でセイバーと対峙していたライダーが振り返り、美綴の背後に回り、美綴の首筋に小刀の刃を突き付けていた。

「……っ!」

不意を突くあまりにも一瞬の出来事で、セイバーですら一步も動けなかった。

負の連鎖

「動けば、この女の命はなくなりますよ」

ライダーが美綴を人質に取ったことで、戦況は一転。俺は慎二に再び近付けずにいた。

「なんだよ衛宮、よくも僕の顔を殴ってくれたね」

先ほどの立場は逆転し、俺は身動きをせずにじっとしていた。

「お返しをくれてやるよ」

そう言って慎二は、俺の顔面を殴り飛ばした。俺はそのまま地面に叩きつけられ、口内は血の味で満たされている。

「不様だね、衛宮。さっきまでの威勢はどうしたんだい？」

慎二の挑発に耐え、俺は一言も言葉を発さなかった。

「なんとか言えよ」

そう言って慎二は、地面に横たわる俺の腹に蹴りを入れた。ゴスという鈍い音がする。

「ちょっと魔術が使えてマスターになったからといって、いい気になってるんじゃないよ、衛宮。どうせ僕には勝てないんだからさ」

二発目の蹴りを放とうと慎二が足を振り上げたその時だった。

「兄さん、やめてください!!!」

ライダーと美綴の背後に桜が立っていた。

「ライダーも美綴先輩を離して!」

ライダーは美綴から小刀を離し、美綴を解放した。俺は状況が理解できず、ただ桜を見つめていた。

「部屋を出るな言っただろう、桜」

「兄さんが多くの人を傷つけているのを知って、黙っているわけにもいきません」

「マスターの権利は僕に譲ったじゃないか」

慎二と桜の会話から内容を察するのは容易なことだった。しかし、理解ができない。桜がマスターだなんて……。

「けれど、わたしはこんな戦いを望んでなんていません。どうして兄さんと先輩が戦わなくちゃいけないんですか。もう、誰かが傷つくのを見るのは嫌です。こんな戦い、もう嫌なんです」

桜はそう言って膝から崩れ落ちた。

「そんなの僕の知ったことじゃないね」

慎二はそう言って魔道書を開いた。俺はその瞬間に立ち上がり、

慎二から魔道書を奪い取る。

「何するんだ！返せ、衛宮！」

「桜、話を続けてくれ」

慎二への怒りは収まっていない。しかし、今は桜の話を聞かなくてはならない。

「僕は衛宮と話をしているんだ」

「黙れ、慎二！！」

俺の怒声で場が鎮まる。そして、桜が口を開いた。

「わたしは間桐の家には養子として入りました。ですから、わたしには魔術回路が備わっているんです。聖杯戦争が始まってわたしはライダーを召喚しました。しかし、わたしは聖杯戦争に参加したくなかった。ですから令呪を二つ使用して兄さんがライダーの代理マスターとして機能するようにしたのです。そしてわたしは、ずっと部屋に籠もっていました。怖かった。でも、兄さんが学校に結界を張って生徒たちから生気を集めていたことを知って、わたしはいてもたってもいられなくなっ……」

桜は慎二を、そしてライダーの姿を見た。

「兄さんもライダーも、そんなことをする人じゃないんです。わたしは、誰にも争ってほしくない。聖杯戦争なんて早く終わって欲しい……」

夜の冬木港は桜を静かに見守る様に、先ほどまで吹き荒んでいた風は止み、穏やかな波の音色だけを伝えている。

桜はゆつくりと決意の言葉を口にした。

「わたしはセイバーのマスターに、ライダーのマスターとして共闘を申し込めます。もう、誰かが傷つくのは見たくないから……」

「ふざけるな。衛宮と共闘することは遠坂との共闘を意味するんだぞ。僕はともかく、桜が遠坂と接触するのは契約違反じゃないか。それにライダーのマスターは僕だ。僕は、衛宮との共闘を認めない」

俺はもちろん慎二の反対を聞き入れるつもりはない。しかし、慎二の言葉に気になる表現があった。

「桜、契約違反っていうのは……」

「それは……先輩、詳しい話は先輩の家で話します。それより早くこの場を離れないと……」

「この場を離れぬとどうなるのかの、桜」

一体何処から現われたのか。歪な容姿をした老人が桜の背後に立っていた。

「……お爺さま」

いつしか暗闇に覆われ、一本の外灯だけが辺りを照らしている。

蟲の羽音が一帯に響き、不気味さを助長していた。

破談

「衛宮の倅に会つのは初めてじゃの。間桐臓硯じゃ。桜が世話になつておるようじゃが、感謝するぞ」

間桐臓硯と名乗る老人は、不敵な笑みを浮かべて静かに立っていた。

「早速で悪いが、桜をお主らに預けるわけにもいなくての。気の毒じゃが、桜のことは諦めてもらうしかないのう」

臓硯が現れて、桜は黙り込んでしまった。そして、臓硯の放つ不気味な威圧感に、俺とセイバーも身動きが取れずにいる。

「桜、帰るぞ。勿論、勝手な真似をした罰は受けて貰うがの」

臓硯はそう言つと、俺たちに背を向けて歩き出した。

「……はい、お爺さま」

桜も臓硯の後を追うように立ち去ろうとする。

「待て、桜！」

居ても立つてもいられず、俺は大声で桜を呼び止めた。

「……先輩」

「どういうことだ、桜。説明してくれ」

「先輩……ごめんなさい。わたしではお爺さまには逆らえません。共闘の話はなかったことにしてください。できれば、今日わたしと会ったことも忘れてください」

それだけ言って桜は、再び歩き始めた。

「待ってくれ、桜！まだ、話は終わっていない」

遠ざかっていく桜の姿を見ると、ここで桜を引き留めなければ一生桜とは会えなくなるような。そんな予感がした。だから俺は必死に桜を追い掛けた。

桜の姿が大きく映るほどまで近づいた。そして桜に手を伸ばそうとした。その時だった。

「衛宮、危ない！」

美綴の声に反応し、俺が頭上を見上げると、一匹の虫が俺を刺し殺そうと目前に迫っていた。

「シロウ！」

瞬間、俺と虫の間にセイバーが割って入ってきた。

「セイバー！！」

俺は一步も動けなかった。俺に向かって一直線に飛来してきた虫は、弾丸のような早さでセイバーに直撃した。ガンという鈍く強烈な音が冬木港に轟く。火花が散った。見れば、鋼鉄のように堅く、

先が鋭く尖った虫が、セイバーの鎧を貫き、皮膚に食い込んでいる。煙や火傷や飛び散る血で、セイバーは見るに耐えかねる無惨な状態だった。しかし、俺はセイバーをただ黙って見ていることしかできなかった。何もできなかった。

「シロウ。良かった、無事そうですね」

致命傷となる傷を負っても尚、セイバーは立ち上がろうとした。そして、自分の心配をする前に、マスターである俺の安否を確かめ、笑顔すら浮かべている。

何もできない自分が悔しかった。今、感情に任せて臆硯に立ち向かえば相手の思う壺だ。所詮、強化の魔術しか扱えない俺が敵う相手ではない。

「ここは私が対峙します。シロウは絶対に動かないでください」

俺の軽率な行動の所為で、セイバーは傷ついた。それにも関わらず、立つことさえままならない状態でセイバーは俺を守るために剣を握っている。見ているだけでも辛い光景だった。

「善哉善哉。マスターを守るために自らを犠牲にするとはのう。とどめを刺すのが躊躇われるのう」

そう言いながらも、臆硯の周囲を飛び回っていた蟲たちが一斉にセイバーの方向に進路を変えて突撃してきた。もう、セイバーは立っているのがやっとで、避け切れる余力も残っていない。

万事休すかと思われた。その時だった。

閃光が走った。

白く眩しい光で一面が覆われる。

目を開くと、俺とセイバーの前には、天馬に跨り、夜空で光り輝くライダーの姿があった。

破談（後書き）

- * - * - * - * - * -

久しぶりの更新です。いやー、さぼってて本当にすみませんでした。

さてさて私のサイトの方でも、もちろん

【2011.05.20】FateA 最新話「会議」更新
しました！！私の作品はちょうど2ヶ月ぶりの更新だったみたいで
すね。サイトの方に来てくださっている皆様にも本当にごめんなさ
い。。。

まあ、2ヶ月何にもしていなかったわけではないんですよ。ちょっ
と、DLsiteで発売する同人誌を作ってます。18禁で型月
とは関係ないんでこのくらいにしておきますが、興味があれば是非
サイトの方へ遊びに来てください。

ライダーとセイバーは書いてて区別をつけるのが難しいですね。う
ーん。

反逆

「ライダー、お前……」

天馬に乗ったライダーがセイバーを抱えたまま天空を舞っている。

「……………」

ライダーは臓硯を見据えたまま沈黙していた。

天空から天馬が俺の前へ降り立つと、ライダーは瀕死のセイバーを俺に預け、臓硯と対峙した。

「貴様のマスターを見捨てるつもりかもう、ライダー」

ライダーは依然言葉を発しない。

「桜の命は、俺の手中にあることは理解しておろう。それでも尚、俺に齒向かうのであれば容赦はするまい」

桜と俺たちの間に臓硯が立ちはだかっている。そして、桜の頭上には数匹の蟲が飛び交っている。

「セイバーとそのマスターを殺せ、ライダー」

臓硯は冷酷にそう言い放った。しかし……

「私はサクラの命令にしか従いません。貴様にサクラは殺せない。」

聖杯として機能し始めたサクラを貴様がみすみす見逃すはずがない」

ライダーは臓硯に対し敵意を剥き出しにしている。その背中からは桜を想うライダーの気持ち、ひしひしと感ぜられる。

「ふおおおお。ライダー、貴様は僕を甘く見ているようじゃのう。僕が聖杯戦争を何度見てきたと思っておるんじゃ」

臓硯は不敵に笑みを浮かべた。

「桜、最後の令呪を使う時がきたようじゃ。早く済ませて屋敷に戻るぞ」

臓硯が静かにそう言う……

「はい、お爺さま」

桜は小さく頷いた。

桜は一步前に出ると顔を上げ、ライダーと対峙する。そして、口を開いた。

「ライダー、幸せになって」

そうして、桜は最後の令呪を使用した。そのまま桜は臓硯の蟲とともに漆黒の闇へと消えていった。

桜が令呪を使用したとともに慎二の持っていた魔道書が燃えだした。気づいたときには慎二の姿もない。桜の令呪に、放心状態となったライダーだけが取り残されていた。

「ライダーさん、ライダーさん！」

美綴が話し掛けても、ライダーは見向きもしなかった。ただ黙って虚空を見つめている。

「ライダーさん、しっかりしてください！」

美綴がライダーを揺ると、辛うじてライダーが反応した。

「アヤコ……」

その声は、俺の知るライダーでは考えられないほど、儚く脆かった。ライダーの姿はまるで恐怖に身を震わす少女そのものだった。

「ライダーさん。あたしは記憶を失って間桐のことは覚えていませんけど、間桐は貴女を見捨てたわけではないことぐらい分かります。貴女のが嫌いななら、最後に『幸せになって』なんて言わない。あたしは間桐を信じてます」

美綴にとってライダーは、その時の記憶を失っているとはいえ、恐怖の対象であるはずだ。そんなライダーに、美綴は寄り添って支えていた。

「私は、アヤコを襲って生気を奪いました。それに結界を発動させて多くの人間に危害を加えました」

「でも、貴女は誰一人として命を奪っていないでしょう」

美綴の言っていることは正しい。ライダーは慎二の命令に従っ

て多くの人間の生気を吸収したが、その実、命までは奪っていないのだ。

「ライダーさんのやるべきことはまだ残っているのではないですか」

美綴の口調はさらに強くなる。美綴はライダーの手を握っていた。

「アヤコ。しかし、マスターを失った今、私の魔力が底をつけば私は消えるしかないのです」

ライダーのサーヴァントには単独行動のスキルが備わっているため、マスターを失った状態でも魔力が尽きない限りは消えることがない。しかし、魔力がなくなってしまうえば消えてしまう。魔力の供給者であるマスターを失ったライダーは、新しいマスターを見つけない限りは、いずれ消えてしまう運命にあるのだ。

「それでも、あたしはライダーさんが………つく！」

その時、美綴の肩口が急に光りだした。以前、ライダーに吸血され歯形が残っている箇所である。

「美綴……それは……」

美綴の肩口に現出したもの。

それは、紛れもなく令呪だった。

反逆（後書き）

- * - * - * - * - * -

どうもお久しぶりです。最近は一ヶ月に一度の更新になってますね……。

こんなペースでは今年中に完結っていうのは難しいことは分かっているのですが、まあ忙しくて進まないのです。出来る限り頑張ります。

というわけで、こちらよりも若干進んでいる我がホムペの更新情報です。

【2011・06・18】Fate A F 最新話「寢床」更新

綾子って書くの難しいっす。いやー、士郎も最近崩壊気味かなあ……。まあ何度かやり直してはいるのですが、ちょいとゲームをもう一度やってみるのも手ですね。そうすりゃ、少しはイメージもしっかりするかなあ。

マスター

「美綴、それは……」

「えっ……」

美綴の肩に発現した令呪。唐突な出来事に誰も身動きが取れなかった。

「ライダーさん……あたし」

ライダーも理解が追いついていないようだ。

「あたし、これでマスターになれる」

単独行動のスキルを持つライダーであってもマスターを失った状態では半日もすれば消えてしまう。もし、美綴がライダーのマスターになればその心配はなくなる。

「アヤコ、しかし私は……」

「ライダー、サクラのサーヴァントであり続けたい貴女の気持ちには分かります。ですが、サクラの幸せと貴女のエゴのどちらが大切だと思いますか。アヤコと契約しなさい。貴女はこのまま消えるべきではない」

ライダーの声を掻き消すように、セイバーの澄んだ声が冬木港に轟く。

「ライダーさん、あたしさ。記憶を失って、生きる意味を失って
たんだ。衛宮や遠坂があたしを励ましてくれたけど、あたしは魔
術を使えるわけでもないじゃない。記憶を失って、守られているだ
けでいいのかって考えた。考えて も答えが見つかることはなくて
…… やつと、あたしの役割が見つかったってわけ」

いつしか吹き荒んでいた風も止んでいる。そして、雲間から
漏れ出する光が二人に射し込んでいた。

「ライダーさん、あたしと組まない？」

弾んだその声は先程の重苦しさを吹き飛ばしていた。空元氣
であつたとしても、その決意は揺ぎがない。一人のマスターがこ
こにいる。

「一度契約してしまえば後には戻れません。それでも良いのです
か、アヤコ」

「ええ、乗り掛かった船だしね」

ライダーは深く息を吐いた。

「分かりました。アヤコ、契約の儀式を始めます」

こうして美綴綾子はライダーのマスターとなった。

マスター（後書き）

- * - * - * - *

とりあえず綾子がマスターになりました。

詳しい説明は、確か次の次の話ぐらいでしてたと思います。

さあて、自サイトの方ではついに2月8日に突入しました。戦闘シーンを書くのが苦手な私にとっては、ここからが勝負ですね。

【2011・07・07】AF 2月8日 3・Nexus「残滓」
更新

ちなみに、七夕は私の誕生日だったりします。

なんで、ハルヒ読んでて鳥肌が立ったりしてます。選ばれし日に生まれて来たのだなあと……ww

拒絶

「おかえり、遅かったわね」

居間の襖を開けると、遠坂が座っていた。

「遠坂、実はさ」

「サーヴァントに襲われたのね、それで綾子は無事なの？」

「ああ、無事だ」

遠坂の表情は険しい。まるで話の流れを見透かしているように、遠坂は魔術師の目をしていた。

「それで、わたしに言いたいことがあるのでしょうか」

静謐とした室内。遠坂の鋭い視線が俺に突き刺さる。

「ああ。美綴がライダーのマスターになった。そして俺は美綴と共闘を申し込んだ」

遠坂は静かに立ち上がった。

「そう。これで、あなたとの契約は解消ね」

無情にも遠坂はそう言い放った。

「遠坂……確かに美綴がライダーのマスターになって、俺は美綴と

組むことにしたけど、お前とだって……」

「わたしとだって何よ。学校に結界を張ったサーヴァントを倒すためにあんたと契約しただけよね。そのサーヴァントのマスターが綾子になった今、綾子と組んだあなたは、わたしを裏切ったということとで間違いはないでしょう」

遠坂の口調に迷いはなかった。感情的にもなっていない。魔術師遠坂凜としての対応。昨日のような遠坂の姿はどこにもない。

「俺は遠坂を裏切ったわけじゃない。これには理由が……」

「全て使い魔を介して見たわ」

「それなら……」

桜とのやり取りを一部始終見ているならば、遠坂を説得する余地はある。遠坂は、人の痛みが分かる優しいヤツだから……。

「忠告するわ。次にわたしと会ったときはあなたたちの命はない。今度こそ容赦はしない」

口を開こうとした俺に返ってきたのは、俺の介入すら寄せ付けない拒絶の言葉だった。

「さよなら、衛宮くん。あんたとの共闘は悪くなかったわ」

「待ってくれ遠坂！」

俺の横を通り過ぎ、出口に向かう遠坂を俺は呼び止めた。

「一つだけ答えてくれ、お前と桜は一体どういつ……」

「血の繋がった姉妹よ」

遠坂は再び歩き始めた。

廊下で待っていた美綴の横も、無言で通り過ぎる。

そこに俺の知る遠坂はいなかった。

拒絶（後書き）

- * - * - * - * -

「アンタね、どんだけサボってるのよ」

「頼む、許してくれ……」

というわけで……うわぁ、3ヶ月ぶりですか。
しかも、たった一話しか書いてないし。

ごめんなさい。ホント忙しかったんですよ。まじで

さて一応サイトも更新しましたよ。

【2011・10・12】AF 2月8日 3・Nexus「微睡眠」更新

他のサークルもやり始めてましてちと連載がね……。

とりあえずAFくらいは連載がんばろうかなと思ってます。

不定期更新ではたして連載と言えるのか？っていうのは気にしないでくださいww

最近、美綴が好きになってきちゃったんですよ。なんかコレ書いてる影響ですよね。

んでも、Zeroの子凜に萌え萌えキュンで……どうしようww

頑張ります！！

一步

「衛宮、遠坂は？」

「帰ったよ」

遠坂と話をつけるため、美綴とライダーには玄関で待機してもらっていた。美綴は玄関で遠坂を見送り、すぐに居間へと駆けつけたのだろう。

「あたしはそんなことを聞いているんじゃない。遠坂はなぜ帰ったんだと聞いているのよ」

「俺が美綴と共闘を申し込んだことで、遠坂との共闘関係は崩れたんだ。再度共闘を申し込んだが、遠坂に拒否された」

「どうして？」

いつも冷静に物事をこなす美綴がこれほどまでに興奮している姿を、俺は今までに見たことが無かった。

「聖杯戦争は、願望機である聖杯をめぐって8人のマスター同士殺し合う儀式だ。本来、俺と美綴も敵なんだよ。それを共闘という形で、一時的に停戦をしているに過ぎない。そして遠坂とも俺は、学校に結界を張ったマスターとサーヴァントを倒すという共通目的があったから共闘していたんだ。だけど。美綴がライダーのマスターになってしまった」

「学校に結界を張っていたヤツってというのがつまり、ライダーなわ

け？」

「そうだ。だからライダーのマスターになった美綴と共闘関係になった時点で、俺は遠坂を裏切ったことになる」

「ちょっと待ちなよ。衛宮と間桐のやり取りを遠坂は見たわけじゃないでしょ。それなら、そのことを説明すれば遠坂だって……」

「いや、遠坂は知っているんだ。使い魔で俺たちを監視していたらしい」

「そんな……」

室内が静まり返る。俺と美綴が対峙し、セイバーは正座して俺たちを黙って見守っている。ライダーの姿はない。

「でも、俺は遠坂のことを信じてる」

俺は、自然とそう口にしていた。

「遠坂は最後まで俺たちを攻撃することはないと思う。確信はないけど、俺はあいつのことを信じてる」

「衛宮……」

「だから、俺たちは俺たちにできることをやるしかない」

セイバーの方に視線を向けると、セイバーは小さく頷きを返してくれた。

「まずは、状況を確認しよう。話を整理して、これからの作戦を立てる。遠坂を説得するかどうか、そのあとで決めればいい」

「シロウの言う通りです。ライダーも呼んで作戦会議を開きましょう。話し合うべきことは山ほどあります」

「……参った。衛宮がまさか、そこまで頭の回るヤツだったとはね。見直したよ」

「記憶を失って、俺と初対面に近いのにか」

「あたしゃ、記憶を失う前から人を見る目は合うと思うんだがね。違ったか、衛宮？」

「そうかもな。美綴には散々馬鹿だと言われていた気がするよ」

「分かればいいさ。じゃあ、話し合いをしましょうか。あたしはどこに座ればいい？」

「ここでいいんじゃないか？」

手近な座席を指差すと、美綴は思案顔で俺に尋ねてきた。

「そこは遠坂が座っていなかった？」

「そうだけど」

「やめた。ここにする」

そう言って美綴りは、俺が指した席を遠く避けるように反対側に

回り俺の隣に座った。

一歩（後書き）

- * - * - * - * -

自サイトの方が、

今日辺りに15万ヒットを迎えそうです!!

そこで今日から一ヶ月

「15万ヒット御礼企画、ひさびさに思いっきりPPしてやるぜ！
！いまあるもん一挙大放し祭」

を開催します!!

AFも更新します。是非遊びに来てください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4398r/>

Fate/the arrow of faith

2011年11月27日09時47分発行